

令和7年度研究実施結果に係る中間・事後評価結果

1. 日時：令和8年6月4日(木) 10:00～15:15

2. 場所：福岡県工業技術センター

3. 研究課題評価委員（敬称略）

仲 孝幸	公益財団法人 飯塚研究開発機構 テクニカルコーディネーター
藤本 潔	公益財団法人 北九州産業学術推進機構 産学連携センター 研究支援グループ統括部長
古川 勝彦	九州大学 学術研究・産学官連携本部 教授
高倉 剛	公益財団法人 福岡県産業・科学技術振興財団 産学コーディネータ
植村 聖	国立研究開発法人 産業技術総合研究所九州センター 所長 ※欠席
権藤 孝雄	株式会社 久留米リサーチ・パーク テクニカルコーディネーター
我妻 広明	九州工業大学 大学院生命体工学研究科 教授

4. 評価結果：事後評価5課題（課題評価結果一覧(事後評価) 参照）

中間評価2課題（課題評価結果一覧(中間評価) 参照）

※事後評価1課題は当日欠席、若手研究1課題は評価対象外

5. 講評(要約)

- 伝統産業における若年層向けの商品開発や、メディカルおよびリサイクル・リユースに関する技術開発は今後も重要な課題となる。社会のニーズを把握した対応を今後も期待したい。取組によって生まれた新しい技術は、支援企業へ紹介していきたい。若手職員の取組についても色々な情報を収集して実績を積み、いずれ展示会出展や実用化へと繋がることを期待したい。
- 今回はチャレンジングなテーマが多かったが、技術を先取りして中小企業へ提供する重要な取組。どうやって実際に使ってもらうかのハードルはあるが粘り強く取り組んでほしい。また、最終的には評価を「人がどう感じるか」に頼らざるを得ない技術分野がある。大学や大手企業では、人間工学や感性工学等の手法により人間の感じ方を数値化し AI により物性等のデータと統合してモデル化する取組も進んでいるが、中小企業はこれからだと思う。個々の評価・技術に目が行ってしまいがちだが、工技センターにおいてもこのような取組を期待したい。
- 事後評価のテーマについては、県内企業にどうやって使ってもらうかが課題である。一つの観点として、布製品やインテリア、食品など「人の身の回り」や「暮らしの中」にある製品については、横のつながりを持たせて展開を図ると面白いと感じた。

- 企業ニーズ等の調査結果からテーマアップを行うのは良い取組である。相談から解決までを導くテーマは、さらに支援の質を向上させるための市場調査やコスト試算も併せてフォローしていくと良い。企業単独ではできないことに取り組み、技術を普及させることも重要。また外部の力を借りて様々なことに取り組むこと、特にコーディネート力(マーケティング・ブランディング)は企業支援において重要であるため、工技センターでも体制を確立していくことを期待したい。
- 工技センターの業務は大学と違って「研究と技術の深化」が最終のゴールではなく、県内企業の支援である。中小零細企業はコスト力が弱く、ブランディングやマーケティングに対応できる人も知見も少ない場合が多いため、社会実装して事業化する際の大きなハードルとなっている。可能であれば、企業の規模等に応じた支援策を提示することが望ましい。
- 企業のニーズや相談に対して常に期待を超えていく必要があることは大変だろうと感じる。またニーズに対して技術が不足していれば、戦略的に先を予測して対処していく必要がある。その中で、長い期間丁寧に支援している事業から新規の攻めた研究まで、センター全体としてバランスよく戦略的に企業の要望に応えられている。センターの価値がさらに上がるよう、今後の活動に期待している。

以上